

為替週間展望 = ドル円は上昇基調が継続か

[12月23日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		12月16日～12月20日		
	始値	高値	安値	終値 前週比
ドル・円	153.62	157.93(20)	153.16(17)	156.88 +3.23
ユーロ・ドル	1.0495	1.0534(17)	1.0343(20)	1.0365 -0.0136

国内株・金利 / 米国株・金利		終値 前週末比		終値 前週末比	
日経平均株価	38,701.90	-768.54	日本10年債利回り	1.060	+0.018
ダウ平均株価	42,342.24	-1485.82	米10年債利回り	4.562	+0.165

< 来週の主要経済統計等 >

- 23日 英第3四半期GDP確報値
カナダ10月GDP、カナダ11月鉱工業製品価格
米12月消費者信頼感指数
- 24日 米11月耐久財受注速報値
米11月新築住宅販売件数
- 25日 日本10月景気動向指数改定値
日銀植田総裁講演
※クリスマスのため、米国、欧州、香港株市場などは休場
- 26日 米新規失業保険申請件数
- 27日 日本11月雇用統計、日本11月有効求人倍率
日本11月鉱工業生産指数速報値、日本11月小売業販売額

【前回のレビュー】米経済指標は一部に弱さも見られるが、おおむね堅調な結果を示している。こうした中、FOMCで今後の経済成長率見通しや政策金利見通しが下方修正されるようならドル売りとなりそうだ。ただ、大幅な景気減速は想定しにくく、政策金利見通しも大幅な下方修正される可能性は低いと想定される。この場合、ドル円は底堅い流れが継続するとした。

【FOMCでは利下げ、日銀会合では据え置き】

12月17～18日に開催された米連邦公開市場委員会（FOMC）では、市場予想の通り0.25%の利下げを決定した。これは想定通りの内容であり、サプライズはなかった。市場を動かしたのはFOMCメンバーによる来年の政策金利見通しで、2025年の利下げ回数見通しが前回（9月）の4回から2回に引き下げられた。利下げペースの鈍化見通しが嫌気されて、米長期金利が上昇するとともにドル買いの動きが加速した。

米10年債利回りは17日の4.398%前後から4.514%前後まで上昇した。NYダウは1100ドル超の急落、ナスダックも3.5%超の大幅安となった。FOMCの結果発表後にドル円は154円台後半まで上昇した。米10年債利回りは19日に一時4.6%に迫る動きを見せた。

18～19日に開催された日銀金融政策決定会合では、政策金利は据え置きとなった。市場の一部では今回の会合で0.25%の利上げに動くとの見方も出ていた。据え置きとなったことで、円売りが広がり、ドル円は155.40台まで上昇した。

その後の植田日銀総裁の記者会見では、「賃金と物価の好循環の確認、もう少し情報が必要」「追加利上げの判断には、もうワンノッチ欲しい」などと述べた。1月利上げ

に向けた前向きな姿勢が感じられず、追加利上げ観測が後退して、円売りの動きに傾いた。ドル円は19日のNY市場で157円台後半まで上昇した。20日は加藤財務相や三村財務官が「為替の動きを憂慮している。行き過ぎた動きには適切な対応をとる」と発言したことで、介入警戒感から157円近辺まで軟化した。

【来年の米PCEは高止まり観測で利下げペース鈍化か】

FOMCメンバーによる政策金利や経済見通し（）は9月時点

<政策金利>

2024年 4.4% (4.4%) 2025年 3.9% (3.4%)

2026年 3.4% (2.9%) 2027年 3.1% (2.9%)

<実質GDP>

2024年 2.5% (2.0%) 2025年 2.1% (2.0%)

2026年 2.0% (2.0%) 2027年 1.9% (2.0%)

<失業率>

2024年 4.2% (4.4%) 2025年 4.3% (4.4%)

2026年 4.3% (4.3%) 2027年 4.3% (4.2%)

<PCE物価指数>

2024年 2.4% (2.3%) 2025年 2.5% (2.1%)

2026年 2.1% (2.0%) 2027年 2.0% (2.0%)

<PCEコア物価指数>

2024年 2.8% (2.6%) 2025年 2.5% (2.2%)

2026年 2.2% (2.0%) 2027年 2.0% (2.0%)

FOMCメンバーによる2025年末の政策金利見通しは前回（9月）の3.4%から3.9%に上方修正されており、利下げペースが鈍化するとの見方につながっている。個人消費支出（PCE）物価指数は、2025年末で2.5%となっており、前回の2.1%からこちらも上方修正されている。インフレ率の高止まりにより、政策金利の引き下げ余地が減少している。

米国での物価の高止まりや利下げペース鈍化は、米長期金利の上昇やドル高につながると思われる。一方で、日銀は植田総裁の記者会見では、次回利上げに関して明言せず、優柔不断で煮え切らない態度を示したことで円売りにつながった。こうした中、ドル円はテクニカル的な過熱感は警戒されるものの、上昇基調が継続するとみられる。ドル円の目先の予想レンジは、154.00～162.00円。

日米の経済指標やイベントとしては、23日に米12月消費者信頼感指数、24日に米11月耐久財受注速報値、米11月新築住宅販売件数、25日に日本10月景気動向指数改定値、26日に米新規失業保険申請件数、27日に日本11月雇用統計、日本11月有効求人倍率、日本11月鉱工業生産指数速報値、日本11月小売業販売額などがある。

【ユーロドルは上値の重い展開か】

FOMCでの政策金利のタカ派的な見通しを受けてドル高に傾いており、ユーロドルは軟調な流れを見せている。5日移動平均線や21日移動平均線に上値を抑えられており、上値の重い展開が続いている。この流れを引き継いで上値の重い展開が継続することとなりそうだ。なお、23日の週はクリスマス休暇で大きく市場参加者が休みに入るとみられ、値幅は限定的なものとなろう。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0200～1.0600ドル。

FOMCを受けてドル買いの動きとなり、ポンドドルは1.2700ドル近辺から1.2560台まで値を崩した。その後は急落の反動から1.2660台まで戻りを見せた。19日の英金融政策委員会（MPC）では政策金利は据え置きとなった。票割れは据え置き6対利下げ3となった。利下げ票が予想を上回り、ポンド売りの反応となり、大きく値を崩して1.2500ドル割れまで下落している。荒れた動きとなる中、ポンドドルもユーロドルと同様に5日移動平均線や21日移動平均線に上値を抑えられており、軟調な推移が続くとみられる。ポンドドルの目先の予想レンジは、1.2350～1.2700ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、23日に英第3四半期GDP確報値、カナ

ダ10月GDP、カナダ11月鉱工業製品価格などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。